

オランダでの国際学会

生命体工学研究科脳情報専攻M2 赤池 早紀



はじめに

明専会奨学金を受けて

私は、平成26年8月25日から27日にオランダのライデンに所在するライデン大学で開催されたNeuroinformatics 2014に参加しました。この学会はInternational Neuroinformatics Coordinating Facility (INCF)が主催し、計算論的神経科学、実験脳科学から得られた知見を情報工学の技術を使って情報統合・解析し、脳の解明や病気の治療に役立つための神経科学のあらゆるレベルやスケールを超えた答えを与えようとするものです。その中に、実験データを理論的に説明する、その説を検証

する脳の構造・機能の数理モデルの設計があります。

私の研究では、どのような脳の働きで人が複雑なパズルを解くことができるのかについて、脳内作業記憶（ワーキングメモリ）と問題の解法と思考が移り変わる過程に注目した数理モデルを提案し、その妥当性を検証することを進めてきました。

国際学会を通して

今回の学会は3日間開催され、私が発表したポスターセッションは初日と2日目に行われました。初日は研究分野の把握と英語の勉強のために口頭発表を聞きました。発表者は世界で活躍するプロの研究者ばかりで、私たちのような学生はほとんど居ませんでした。英語で話される専門的な単語の連続、なんとその話す速度が速いことには驚きました。私は話についていくことができず、とても悔しい思いをしました。2日目、

ポスターセッションでの発表ではとても緊張しました。今まで英語での研究発表もありましたが、外国人といっても学生に対してのものばかりでした。この学会でも、これまでの

経験を生かし、英語で伝わらないところは図を使って説明し、何度もやりとりをすることで議論を進める方法を試みました。しかし、今回は全員プロの研究者で、説明が下手だとポスターの英文を「自分で読むからいい」と通り過ぎたり、なかなかコミュニケーションができません。英語が伝わらない、話す技術が低いと最後まで話を聞いてもらえないという悔しさと憤りを体験しました。自分の英語力、発音、発表技術を上げていかなくてはならないと、終わった後に考えるのも悔しい思いです。

今回の学会で滞在していたオランダは日本よりも平均気温が低く、日本の夏よりも過ごしやすい気候でした。午後8時までは夕方のような明るさが続き、博物館や美術館の多さという日本との違いを感じる事ができました。実際にハーグにあるLOJMAN MUSEUMに行くと、そこでは歴史的なものに触れることが

でき、想像以上の満足感を得て、とても貴重な経験になりました。

おわりに

初めて国際学会に参加して、英語力と発表技術の未熟さを実感しました。国際的な場で様々な国の研究者に自分の伝えたいことを伝え、議論するための英語力、内容を伝えるための技術、もっと知りたくなるような表現力が大変重要だとわかりました。短期間ではありましたが、海外での生活は多くの刺激を感じることができた。最後に国際学会参加における旅費支援につきましては、奨学金を援助してくださった明専会に、心より感謝申し上げます。



アムステルダム・ダム広場